

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：37111

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22004

研究課題名（和文）翻訳研究の視点を応用した少数言語文学研究の基盤構築

研究課題名（英文）Establishment of bases for the study of literatures in minorized languages through the application of the perspectives of Translation Studies

研究代表者

金子 奈美 (Kaneko, Nami)

福岡大学・公私立大学の部局等・講師

研究者番号：10880908

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、筆者が以前から取り組んできたバスク語作家の創作と翻訳についての研究を、個別の作家をめぐる考察からバスク語文学全体、さらに少数言語文学についての考察へと発展させるための基盤構築を行なうことを目的とした。従来の文学研究でほとんど扱われてこなかった少数言語文学の研究としてバスク語文学研究を改めて位置付けるにあたって、近年発展著しい翻訳研究の知見を取り入れ、かつ他のさまざまな少数言語文学に関する文献を参照しながらの調査・分析と考察を行なった。その結果、少数言語文学に特有の条件や性質、それらを分析するための視点や方法論についてより考察を深め、今後の研究のための重要な視座を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、とりわけバスク語文学作品の日本語への翻訳によって国内外で高く評価された。2020年に翻訳出版したベルナルド・アチャガの長篇小説『アコーディオン弾きの息子』が、第七回日本翻訳大賞の最終候補作品となったほか、スペイン・バスク自治州にて第七回エチエパレ＝ラポラル・クチャ翻訳賞を受賞した。また、バスク語のような少数言語による文学が翻訳される意義と重要性、そしてそうした翻訳の現状と課題について、アカデミックな場だけでなく、一般読者を対象とした複数の書籍においてもわかりやすく論じた。こうした本研究の一連の活動を通じて、少数言語文学と翻訳というテーマを学術的かつ社会的に可視化することに貢献できた。

研究成果の概要（英文）：This research was aimed at establishing bases to develop my long-standing project on Basque language literary creation and translation, from a study on an individual author to a research of Basque literature as literature in a minorized language. For this purpose, I conducted a series of analysis and reflections, incorporating insights from the recently evolved field of Translation Studies and researches on other literatures in minorized languages. As a result, I could delve deeper into the particular nature and conditions of these literatures, as well as into the viewpoints and methods for analyzing them, obtaining new important perspectives for future research.

研究分野：バスク語文学

キーワード：バスク語文学 少数言語文学 翻訳 バスク語 文学研究 翻訳研究 自己翻訳

1. 研究開始当初の背景

筆者が専門とするバスク語(スペイン北部とフランス南西部に跨るバスク地方の固有語)は、地球上に存在する他の多くの少数言語と同様に、近代に確立された国民国家のシステムの周縁で、もっぱら複数言語環境において、他のより標準化・制度化された言語の支配のもと、衰退と消滅の危機に晒されながら存続してきたという特徴を持つ。それぞれ固有の文化と伝統を持つこれらの言語のなかからは、バスク語のように、20世紀後半からの言語復興の進展や言語的多様性への意識の高まりに伴い、かつてないほどの数の質の高い文学作品を生み出すようになり、国際的な認知を得るものも出てきた。しかし、従来の文学研究(「国民文学」のモデルをベースとする)において少数言語文学は顧みられることがなく、比較文学や近年「世界文学」の名の下に提示されつつある新たなアプローチにおいても、少数言語の作家や作品が考慮されることはほとんどなかった。

かねてよりバスク語作家ベルナルド・アチャガの研究とバスク語文学作品の翻訳に取り組んできた筆者は、自身の研究を個別の作家研究からバスク語文学全体をめぐる議論へと展開させるにあたって、より広い視点から少数言語文学について、そしてそうした文学を扱うための観点や手法について考察を深める必要性を感じていた。同時に、筆者がバスク語文学との関連で取り組んできた翻訳研究においては、近年になって、とりわけ自己翻訳(作者自身による翻訳)の分野において、少数言語文学を取り上げたものが国際的に目立つようになってきたため、翻訳研究の視点を応用しつつ、他のさまざまな少数言語文学に関する文献に広くあたって考察を深めることで、今後の研究のために有益な知見や視座が得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究課題『翻訳研究の視点を応用した少数言語文学研究の基盤構築』は、以下の二つを目的とした。

- (1) 筆者が以前から取り組んできたバスク語作家の創作と翻訳についての研究を、個別の作家をめぐる考察からバスク語文学全体、ひいては少数言語文学についての考察へと発展させるための基盤構築を行なうこと。
- (2) 従来の文学研究でほとんど扱われてこなかった少数言語文学というカテゴリーを提起することで、いまだメジャー言語で書かれた文学を中心として考察されている「世界文学」に対して異なる視座を示すこと。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するため、次のような方法で研究を進めた。

- (1) 従来の文学研究で顧みられてこなかった少数言語文学の研究としてバスク語文学研究を改めて位置付けるにあたって、近年進展著しい翻訳研究の視点を取り入れることで、言語間の非対称な力関係や複数言語環境といった少数言語文学に特有の背景と、そこから生じるテキストの産出・流通・受容と翻訳(とりわけ「自己翻訳」)をめぐる諸問題に焦点を当てる。
- (2) (1)と並行して、他のさまざまな地域の少数言語文学に関する文献を広く収集し、その動向を探ると同時に、研究の視点、方法論、問題意識などについてバスク語文学研究との比較で考察する。
- (3) かねてから手がけているバスク語文学作品の日本語への翻訳と、それに関連した研究およびアウトリーチ活動を継続し、少数言語文学とその研究や翻訳に対する学術的・社会的な関心を高める。

4. 研究成果

- (1) まず目立った成果としては、バスク語文学作品の日本語への翻訳によって国内外で高く評価されたことが挙げられる。2020年に翻訳刊行したベルナルド・アチャガの長篇小説『アコーディオン弾きの息子』が、第七回日本翻訳大賞(2021年)の最終候補作品となったほか、スペイン・バスク自治州にて第七回エチェパレ＝ラボラル・クチャ翻訳賞(2021年)を受賞した。これにより、日本と現地の双方で、バスク語文学とその翻訳に対する注目を高めることができた。
- (2) 計画当初はかねてより継続していたテキスト分析を基本とした研究の展開を構想していたが、自身の手がけた上記の翻訳の経験や反響から、バスク語のような少数言語からの翻訳についてさらに考察を深める必要を感じ、より外的な(流通や受容といったテキスト外の)側面からの少数言語文学と翻訳をめぐる調査・分析と考察を中心とする方向に転じた。そこで、少数言語文学においてしばしば起きる自己翻訳が行われた作品が他の言語へいかに翻訳されるか、というテーマに新たに取り組んだ。自己翻訳された作品は、原語のテキストから、または自己翻訳テキストから訳されることもあれば、両方のテキストから折衷的に訳されることもあり、拙訳『アコーディオン弾きの息子』は最後

のケースにあたる。調査の結果、このテーマも、折衷訳というストラテジーも、過去の翻訳研究ではほとんど注目されてこなかったことが判明した。研究の暫定的な成果は国内学会で口頭発表し(2021年)、翻訳研究の国内学会誌への論文投稿を目指したが、その過程で、こうした二重に新しいテーマを論じるにはより論点を整理したうえでさらに踏み込んだ調査や分析を行なう必要があること、また国内ではそもそも自己翻訳をめぐって近年国際的に蓄積されてきた知見が共有されていないことが明らかになったため、そうした課題を解消すべく今後も継続的な取り組みを行なっていくつもりである。

- (3) (2)と関連して、少数言語文学の翻訳という観点から、バスク語文学の世界各地の言語への翻訳を促進するための公的な政策について調査・分析し、その一部を「バスク語文学と翻訳」として近刊の『現代バスクを知るための60章【第2版】』(2022年)に寄稿した。バスク語文学は、現代の少数言語文学のなかでもとりわけ他の言語への翻訳が進んでいると考えられ、少数言語文学に関する文献調査でも、少数言語から他の言語への翻訳というテーマを扱ったものがなかなか見つからなかったことから、その性質や意義、現状と課題について論じることは重要な貢献となると思われる。今後よりまとまった形式での成果発表に繋げたい。
- (4) 同じく(2)との関連で、バスク大学夏季講座での招待講演でバスク語文学の翻訳とその国際的なコンテクストについて論じ、さらに同テーマで国内の一般向け書籍『「その他の外国文学」の翻訳者』(2022年)への寄稿を行なった。(3)と共通して、バスク語のような少数言語による文学が翻訳される意義と重要性、そしてそうした翻訳の現状と課題について、アカデミックな場のみでなく、一般の聴衆や読者に向けても解説することができた。
- (5) 少数言語文学全般をめぐる状況や、少数言語文学を研究するための視点や方法論、そして翻訳研究との接点への関心から、世界のさまざまな少数言語文学について、手話のような視覚言語(齊藤、2007)も含めてできるだけ幅広く文献収集を行ない、バスク語文学およびその研究の歴史や現状と照らし合わせながら考察した。その結果浮かび上がってきたのは、世界に存在するさまざまな少数言語文学は、それぞれの具体的な歴史的・社会的背景や現状こそ異なるが、その存在と尊厳を外部から認知されるということが、文学の発展のみならず、言語そのものの存続や、その言語文化をアイデンティティとするコミュニティの尊厳の回復にとって欠かせないという共通認識である。そうした外部からの認知を得るため、そしてまた一方では併存する支配的言語の社会との相互理解のために、少数言語を理解できずともその言語で生み出された文学作品にアクセスすることを可能にする翻訳が重要になってくる。さらに、少数言語文学は隣接するメジャー言語への翻訳を付した二言語ないし多言語版で刊行されることも多く(Krause 2007, Del Valle Escalante 2015)、作者は通常メジャー言語とのバイリンガル(ないしマルチリンガル)であることから、作者自身が自作の翻訳者であり、メジャー言語を介した外部への媒介者であるというケースが少なくない。少数言語と翻訳をめぐる研究のパイオニアであるCronin(1998)が看破していたように、少数言語文化と翻訳はきわめて密接に結びついているのである。

ところが、少なくとも管見では、少数言語文学研究における翻訳研究への直接的な言及はきわめて少ない。ただ、従来の文学研究からは無視ないし排除されてきた少数言語文学を分析し、考察するために適切な理論や手法が構築されてこなかったという問題意識はさまざまな研究者のあいだで共有されており、そのなかで翻訳(特に自己翻訳)をめぐる問題系が言及されることはある(Toninato 2014, Krögel 2021)。また、「コンタクト・ゾーン(接触領域/地帯)」など翻訳研究と親和性の高い概念(Pratt 1992, Simon 2013)を、少数言語文学の基本的な条件として言及した研究も散見される。こうしたことから、言語・文化間の非対称な関係とその間の交渉に焦点を当てることを容易にする翻訳研究の用語・概念や理論的枠組みを少数言語文学に応用するのは、個別の文学や作品の分析のためばかりでなく、例えば異なる少数言語文学同士の比較を可能とする将来的な研究の枠組みを視野に入れるならば、適切かつ必要なことではないかという考えを新たにした。

また、ロマ語文学についての研究(Toninato 2014)などにも指摘されているように、少数言語文学は、国家という中央集権的な機構や均質的な制度を欠き、しばしば歴史的・社会的・言語文化的状況の大きく異なる複数の政治体に跨って存在しているために、時代的にも地域的にも非常に不均質な発展プロセスを経てきており、全体としての把握や記述が困難であるという特徴がある。そうした文学をどのように捉えるかという視点の問題は、テキスト分析はもちろん、文学史の記述というより大きな問題にも関係している。著述にはもっぱら別の支配的言語が用いられてきたという経緯を持つ少数言語文学の歴史を、複数言語環境、そして時代や地域によってさまざまな個人的・社会的背景も踏まえながらいかに記述するかというのは、バスク語文学研究においても近年提起されてきた課題であるが(Olaziregi 2012, Gabilondo 2016)、本研究を通じて得られた新たな視座を生かし、今後の研究でさらに考察していければと考えている。

<参考文献>

- Cronin, M. (1998). "The Cracked Looking Glass of Servants". *Translation and Minority*, 4: 2, 145-162.
- Del Valle Escalante, E. (ed.)(2015). *Teorizando las literaturas indígenas contemporáneas*, Raleigh, NC: Editorial A Contracorriente.
- Gabilondo, J. (2016). *Before Babel: A History of Basque Literatures*, Barbaroak.
- Krause, C. (2007). *Eadar Dà Cha`nan : Self-Translation, the Bilingual Edition and Modern Scottish Gaelic Poetry*, unpublished doctoral dissertation, University of Edinburgh.
- Krögel, A. (2021). *Musq Illa. Poética del harawi en runasimi (2000-2020)*, Lima: Pakarina Ediciones.
- Olaziregi, M. J. (ed.) (2012). *Basque Literary History*, Reno: Center for Basque Studies, University of Nevada, Reno.
- Pratt, M. L. (1994). *Imperial Eyes. Travel Writing and Transculturation*, London: Routledge.
- Simon, S. (2013). "Translation zone", in Y. Gambier & L. van Doorslaer (eds.), *Handbook of Translation Studies Vol. 4*, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 181-185.
- Toninato, P. (2014). *Romani Writing. Literacy, Literature and Identity Politics*, London: Routledge.
- 齊藤くるみ (2007). 『少数言語としての手話』, 東京大学出版会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金子奈美
2. 発表標題 自己翻訳作品を翻訳する：ベルナルド・アチャガ『アコーディオン弾きの息子』の邦訳における「折衷訳」という戦略について
3. 学会等名 世界文学語圏横断ネットワーク第13回研究集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 キルメン・ウリベ著、金子奈美訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 232
3. 書名 ビルバオ-ニューヨーク-ビルバオ	

1. 著者名 白水社編集部（編）、斎藤真理子（序文）、鴨志田聡子、星泉、丹波京子、吉田栄人、青木順子、金子奈美、福富渉、木下真穂、阿部賢一（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 228
3. 書名 「その他の外国文学」の翻訳者	

1. 著者名 萩尾生、吉田浩美（編著）、石塚秀雄、上田寿美、内田瑞子、オルティゴース・ガリ、梶田純子、金子奈美、砂山充子、竹谷和之、友常勉、渡邊千秋（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 現代バスクを知るための60章【第2版】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・招待講演 “Atzerriko euskara ikasle izatetik euskal literaturako ikerlari/itzultzaile izatera: mugak eta erronkak” [海外のバスク語学習者がバスク語文学研究者・翻訳者になるまで：境界と挑戦]、バスク大学夏期講座 “Mugak eta mugimenduak euskal kulturari” [バスク文化における境界と移動]、2021年7月19日。
 ・第七回日本翻訳大賞（2021年）最終候補、第七回エチエパレ＝ラポラル・クチャ翻訳賞（2021年）受賞。ベルナルド・アチャガ『アコーディオン弾きの息子』（金子奈美訳、新潮社、2020）による。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------